

て如来の法身を觀じて、常に勤修すれば又往生し正定に入ることが出来ると言う勝方便による不退を得る道を説いているのに注意すべきである。又易行品では、仏名を開信し称念することによる不退を説いているに對して、起信論では阿彌 仏を専念し善根を廻向することによる往生を明かしている。専念と言うのは、恐らく觀經に説くが如く觀念の念仏と思われる。次に法身觀を併説しているか無相觀であり理觀であるとすれば、今の専念は仏の相好を觀する有相觀であり事觀であらう。又注意すべきは、易行品は現身に於いて不退に入る道として聞名称名を説いているが起信論では不退を目標とすることは事実としても、その不退に至る前提として先ず仏國に往生することを求めている。即ち念仏によつて往生し、往生によつて見仏する。見仏によつて不退を得、而して徐々に薩への行を積むのが順序である。以上の如く見ると起信論念仏即ち、觀念口称の兩通を以つて説いているところは、今日淨土教に於ける称名念仏の意味と恐らく共通するところであらう。

法然教學の思想史的研究

松 永 寿 秀

私はこのたび卒業論文を書くに當つて今年法然上人が往生されてから七百五十年に當り記念すべき年でもあるので、淨土宗開祖法然の教學について根本的に研究してみようと思つた。そこで法然教學といつても問題が非常に大きすぎるので特に「選択本願念仏の義」を中心として思想史的に考察してみた。

法然の開宗運動が平安中期以来の淨土教を繼承してあらわれたことは多くの學者によつて論ぜられているところであるが、専修念仏という点で、従来の淨土教と區別される。従来の念仏信仰はさまざまの功德を併せ修したのであるが、法然は唯念仏一行を専修して、余行をことごとく捨閉拋闕すべきことを主張して念仏の外に正因なしと断じたのである。

又従来の念仏には理觀の念仏とか、色想觀とか雑多な

種類があつたが、法然において念仏とは称名念仏のみを意味し、雑行の道にたえざる末世の凡夫は散心のまま仏名を称えれば往生する。この外に往生の道があると思うは仏の本願に叶う所以でないと説き、これまで念仏は諸宗でその本業の外に兼修するところであつたが、法然は浄土宗という一宗を決然と独立させたのである。かかる新義の樹立は、法然が多年の求道の遍歴を経て、往生要集に導かれ、善導の觀經疏を発見し、これによつて回心せられたのである。法然は自分自身の求道、信仰体験から前説をこえて獨創的な見解に達せられ、いわゆる「選択本願念仏義」を樹立されたのであり、革新的な主張となつたのである。

法然は往生要集に導かれて善導の觀經疏を発見し称名正因の典拠を見出した。善導の本願念仏と法然の選択本願念仏とは同じものではなく、法然は称名正因説を立て称名を正定業として念仏をすすめられたが、善導は「専ら彼仏の名を称し、彼仏及び一切の聖衆等を専念、専想、専礼、専讀して余業を雜えざれ」と述べてあるので、正行を並び修する意であることは疑いなく、同じ専修とい

つても法然が阿彌陀經の説誦もやめ、但信称名の行人となられ一向専修されたのはことなるのである。更に万徳所帰説、称名易行説においては、善導の本願念仏を継承し、更に一段と飛躍徹底せしめたものというべきである。法然は称名が万徳に帰するところであるという思想と、仏の本願は無智破戒の民衆にも及ばなければならぬという自覚にもとずいて選択本願念仏義を樹立された。かかる法然自身の自覚に立つてはじめて觀經疏を自己のものとされたのであらう。万徳所帰の説も念仏は阿彌陀仏か法蔵比丘の昔から一切衆生救済のためにあらゆる修行を成就し、其の一切の功德を悉く六字名号に包摂して衆生に回施したまうものであるという一切衆生救済というところに主眼がおかれているのであり、法然の選択本願念仏義の樹立は貧窮、因乏、破戒無戒の末法の衆生、罪惡生死の凡夫が我土から浄土に往生する方法の証得を求道の課題とした法然独自のものである。故に「往生之業念仏為先」は源信の説くところであつたが、法然は種々の行法の中から念仏を選んだのでなく、念仏が念仏以外の行法と別の意義と価値をもつことは善導によつて明

らかにされたのである。即ち「善導の意によれば念仏はこれ彌陀の本願なり」と彌陀の本願であるから法然にとつて自分のものとなり得たのである。されば望月博士もいわれる如く選択集に示された三重の選択も一面に於いては上人信仰の歷程を語るものといえる。

こうした法然求道の課題は彼の生涯の目標でもある。

それはどこから出て来たかと思うに律令体制の崩壊が加速度的に深化し、悪僧、神人の闘争、嗷訴、悪疫、水難、火災、ききんなどの継起、一方では武士の興起と未法的な危機が激しくなつた時期、法然が九才になつた時、父は討たれ、法然は悲劇に見舞れた。そして「自分はとも助らない。この疵によつて死んで行くが、しかし決して敵を恨んではならない。もしお前が復讐を思うなら争はいつまでも絶えないであらう」と遺言された。このことはこの遺言を忘れず、比叡山で修学を続けた法然にとつて人生の課題に直面せしめる結果となつた。

終りに法然の浄土宗の独立は教理史的発展だけでとらへ得るものでなく古代より中世への転換期における社会変革との関連についてみていくことが大切であることを

感じる、その点まで及び得なかつたことは残念である。しかし、法然教学の現代的意義が法然教学成立の時代的背景を無視して考えられるべきものでないことは否めない事実であらう。

インターネット公開許諾のない文章には
墨消し処理を施しています。